古代アメリカ学会会報

第 21 号

エクアドル・アスアイ県・チュンブリンのビルヘン

目次

◆会員からの投稿
◆『古代アメリカ』の原稿募集
◆役員会報告
◆第 11 回総会報告
◆第 11 回研究大会
◆会計報告
◆新入会員
◆事務局からのお知らせ
◆次回研究大会の日程変更について

2007 年 2 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

2 カトゥン目のマヤ文明の研究

青山和夫（茨城大学教授）

私がマヤ文明の研究に従事するようになって、21 年余の歳月が流れた。マヤの長期暦でいえば、約 20 年に相当するカトゥン（7200 日）の 2 カトゥン目に入ったことになる。大学、市民大学、講演会などで最も多い質問は、「青山先生は、どのようにしてマヤ考古学者になったのですか」である。この質問には、口頭だけでなく、活字（青山 1992, 1997, 1998, 2005）でも答えてきたが、本稿は大幅に加筆した最新拡大版である。

私は、いわゆる考古ボーイであった。小学校 2 年生の時に、友達に誘われて、自宅の近くの遺跡を「発掘」した。スコップで少し掘ると、縄文土器片や石器がたくさん出てきた。意気揚々として、小学校の先生に見せにいったら、「それは盗掘なので、今後はやらないように」と釘をさされた。「それでは遺跡に返してきましょう」と私が言うと、「遺物はもとの位置にないと学術的価値がないから、家に持って帰りなさい」とおっしゃった。私は考古学という学問の一端に触れた気がして、とても感動したことを覚えている。「発掘」した遺物は、表面採集した遺物と共に、 少年時代の私の宝物であったが、数年前に帰省した時に、母から「押入れの中にある土器や石器はもう捨ててもいいかね」と言われてしまった。いずれにしても、考古ボーイが夢を追いかけて成長したのが、基本的に現在の私である。

ふるさとの京都市には「京大至上主義」が存在し、両親、教師や周囲は京都大学進学を強く望んでいたが、私はこのままでは井の中の蛙になるという危機感を持っていた。さらに石器時代に大いに興味を抱いていたので、古墳時代中心の京大ではなく、芹沢長介先生を擁する日本の石器研究の中心であった東北大学に進学した。振り返ると、18 才で京都を出なかったならば、今日の自分はないと思う。幸いにも、東北大学石器使用痕研究チームの一員となり、東北大学文学部史学科考古学専攻（卒業論文は「石包丁の実験使用痕研究」）を卒業した。後に使用痕研究は、私のマヤ考古学の「伝家の宝刀」になった。なお、2007 年 3 月に *Latin American Antiquity* に掲載されるアグアテカ遺跡出土の石器の使用痕研究に関する英文論文（Aoyama 2007）は、芹沢先生（2006 年 3 月没）の追悼論文である。

私の「マヤ文明との出会い」は、東北大学卒業後、1986 年に青年海外協力隊考古学隊員としてたまたま中米のホンジュラスに派遣されたのがきっかけである。同国西部のラ・エントラーダ地域で実施された、ホンジュラス人類学歴史学研究所と青年海外協力隊の国際協力プロジェクトの一員として、マヤ文明の調査に携わるようになった。たまたまホンジュラスに派遣されたというのは、遺跡の踏査・測量・発掘調査および大学で専門的に学んだ石器の研究などの遺物の分析といった、協力要請の内容が、自分の微力な能力を最も生かせそうだったので任国として希望したのにすぎない。「国際協力」にささやかながら貢献できればというのが参加の最大の動機だったのであり、マヤ文明が大好きな「マヤおたく」ではなかったどころか、正直にいってマヤ文明に関する知識は皆無に等しかった。ちなみに私が 1985 年に協力隊の試験を受けた時には、考古学隊員の派遣国として南米のペルー（国立考古学博物館でガスマスクを着用して約 3000 体のミイラの分類）とオセアニアのパプアニューギニア（国立博物館における遺物の整理）もあった。

東京大学教授であられた日本のラテンアメリカ研究のパイオニア増田義郎先生と大貫良夫先生から、日本や現地において暖かい御指導をいただいたことは特筆に価する。協力隊の 2 次試験では、増田先生が口答試験を担当された。「君はどのようにマヤ文明を勉強しましたか」という質問に、「八杉佳穂先生の『マヤ文字を解く』を読みました」と答えると、「それはいい本ですね。Sharer *et al.* の *Ancient Maya* も読みなさい。それからスペイン語を一生懸命に勉強しなさい」とおっしゃった。増田先生と大貫先生は、その後 JICA の短期専門家として、ラ・エントラーダ考古学プロジェクトの点検評価のためにホンジュラスまで来てくださった。自分が大学の校務に忙殺される毎日を送っていると、お二人のご厚情がいかに例外的であったかがよく理解できる。なお数年前に『民博通信』編集部より修正加筆版の文庫『マヤ文字を解く』の書評（青山 2004）の執筆を依頼され、感無量であった。

協力隊員として 1986 年 3 月末に派遣される直前に、協力隊 OB の猪俣健さん（1983～1985 年派遣、当時は東京大学文学部学生）と初めて東京で会った。私より 1 才年上の寡黙な青年という第一印象であったが、初対面であるにもかかわらず、突然「青山君は、マヤ文明を本気で研究して、マヤ学者になりませんか」と言われた。私は、そんな気は全くなく、最初の予定では、2 年の任期が終了した後に日本に帰って、大学院の試験を受けるつもりであった。ところが、結果的には予定に反して、10 年間ホンジュラスでマヤ文明の調査に従事することになってしまった。さらに猪俣さんは、私の生涯の親友になった。

派遣前の私は、ホンジュラスがどこにあるのかさえ正確

に知らなかったが、急速にマヤ文明の研究の面白さに吸い込まれ、没頭していった。もう一つ予定外だったのは、本ジュラスに着任して2ヶ月ほどで意中の女性（現在の妻ビルマ）に出会ったことである。スペイン語も大学生の時は全く知らなかったが、協力隊の国内集中語学訓練（4ヶ月）、メキシコでの現地語学訓練（6 週間）、任地での協力活動や生活を通してかなり上手くなった。しかしなんといっても「愛の力」が一番大きく、ビルマと知り合ってから格段に上達した。私にとって「遠い外国の遠い昔の文明」が、「恋人が生まれた国の古代文明」になった。

結局、任期を延長してラ・エントラーダ考古学プロジェクト第1期調査に3年1ヶ月（1986～1989年）ほど参加した。野外調査や遺物の整理は、朝7時すぎから、午後4時頃まで行う。ラ・エントラーダ市はコパン県で2番目に大きな市町村であるが、隊員時代（人口約1万5000人）には水道も電気も電話もなく（現在はすべて完備されている）、キューバ系の家主の自家発電機で朝6時頃に1時間ほど時間供給される井戸水を貯めて炊事や水浴をし、夕方6時から10時まで時間供給される電気の下で、その後はコールマン社製のランプの光の下で、遺物を分析し、英語やスペイン語の専門書を読んで暮らした。2週間に1度、週末に7時間かけてバスを乗り継いで首都テグシガルパ市（人口約115万人）まで当時恋人だったビルマに会いに行く以外は、土曜日も日曜日も働いた。最高47度の暑さのなかの発掘調査も、マヤ文明の研究が好きだから苦にはならなかった。

それから現地で結婚して、1989年7月から11月まで、ウィリアム・ファーシュ博士（現ハーバード大学人類学部教授）が指揮するコパン・アクロポリス考古学プロジェクトに、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所の研究員として参加する機会を与えられた。参考までに月給は、1400レンピーラ（当時は1米ドル＝約3レンピーラ）であった。同プロジェクトは、当時マヤ考古学で最大の調査団であり、著名なアメリカ人研究者や大学院生たちと交流して、多くの新しい知見と今日までつづく友情を得ることができた。コパン遺跡は、ラ・エントラーダ市から車で1時間ほどのところにあり、コパン遺跡村（人口約5000人）の唯一の日本人住民として、新婚生活と新たな研究生活を送った。「恋人が生まれた国の古代文明」が、「妻が生まれた国の古代文明」になった。

1990年から1992年まで、ラ・エントラーダ地域の第2期調査に隊員チームのリーダーのシニア隊員として、同地域屈指のマヤ文明遺跡の一つエル・プエンテの発掘・修復・遺跡公園化および業務調整に没頭した。シニア隊員時代は、調査・研究よりも業務調整に忙殺され、毎日16～17時間ほど働いたが、その経験も今日にいたるまでいろいろな意味で大いに役立っている。とりわけ、極めて多種多様な申請書や書類を書いたことが、後の科学研究費補助金や財団の研究助成金の獲得および迅速な事務処理能力の向上につながっている。ホンジュラス第2の都市サン・ペドロ・スーラ市（人口約80万人）で長女さくらが生まれ、かつての「遠い外国の遠い昔の文明」が「妻と長女が生まれた国の古代文明」になり、さらにより身近に感じられるようになった。

＜コパン遺跡の「石碑 6」（7 世紀）の前の妻ビルマと長女さくら（1993年）＞ ©青山和夫

私はホンジュラスだけでなく、メソアメリカ全体の文化・歴史、そして人類学・歴史学としてのマヤ文明の研究についての見識をさらに広め、深めるために、マヤ考古学の権威ジェレミー・サブロフ博士を擁するピッツバーグ大学大学院人類学部博士課程に、29才の時（1992年）に妻ビルマと長女さくらを引き連れて留学した。大学院受験にあたっては、現地でお世話になっていたファーシュ先生とウェンディー・アーシュモア先生（現カリフォルニア大学リバーサイド校教授）、大貫先生に推薦状を書いていただいた。留学前に、コパン遺跡を調査中のファーシュ先生に挨拶に行った。「大学院では1年目は苦しいが、とにかく無我夢中で勉強に専念しなさい。自分もそうだったが、2年目からは楽になる。指導教官には問題を持ち込むのではなく、まず自分で解決策を考えてから選択肢を提示して、先生の時間の節約に努めなさい」というアドバイスをいただき、極めて参考になった。

教授会におけるサブロフ博士のご推薦により、幸いにもハインツ財団から出資されるラテンアメリカ考古学特別研究員（Heinz Fellow）に日本人として初めてなることができた。授業料が免除されるだけでなく、毎月の研究・生活費1000米ドルと毎学期の本代200米ドルが支給された。Academic performance が際立っていれば（outstanding）、次年に更新可能という条件付であった。私は、博士課程の

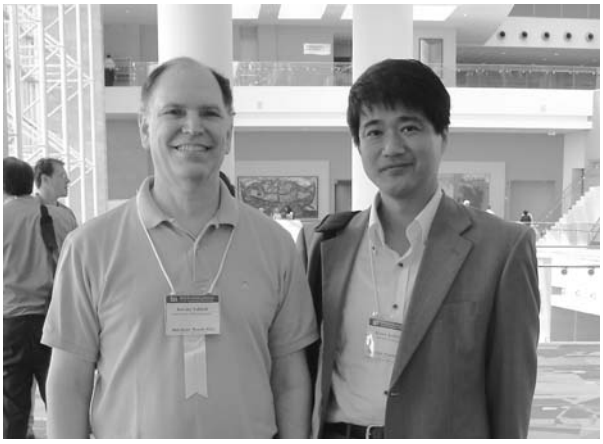
72 単位を取得すべく猛勉強し、オール A の成績を残した。とりわけ、アメリカの大学院演習（ゼミ）では、学術的に有益な発言ができないと「nobody」とみなされる。私は、毎回の授業の前に自分の発言内容を綿密に練り上げ、入念にリハーサルしてから臨んだ。この経験は、国内外の学会発表、授業や講演会に大いに役立っている。また院生 1 年生の時から、*Journal of Field Archaeology* や *Latin American Antiquity* に論文を投稿・出版した。スペイン語も話せる、考古学専攻で唯一の日本人院生ということもあってか、アメリカ人や 25 名を越えるラテンアメリカの院生諸君は私にとても親切だった。その多くが、かけがいのない生涯の友になっている。

私は、1993 年から 1995 年まで毎年 5 月から 8 月までの 4 ヶ月間、博士論文の研究のためにホンジュラスでコパン･アクロポリス考古学プロジェクト唯一の日本人調査員として研究に従事した。そして、1996 年は、ピッツバーグ市で生まれた二女美智子の元気な泣き声を聞きながら、10 年間の研究成果をまとめた博士論文の執筆に専念した。同年には、英語と日本語の査読論文も 3 本投稿したが、博士論文審査委員のロバート・ドレナン先生から「君はいつ寝ているのかね」と聞かれた。結果的に、4 年間で修士号と博士号の両方を取得して、ピッツバーグ大学大学院人類学部の最短記録を塗り替えたのである。

私は、1997 年に、日本のマヤ民族学のパイオニア落合一泰先生（現一橋大学大学院社会学研究科教授）の後任教官として、茨城大学人文学部に就職し、1998 年から、親友の猪俣さん（アリゾナ大学人類学部助教授）が団長をつとめるグアテマラのアグアテカ遺跡の調査に共同調査団長として参加した。2005 年からは、同国のセイバル遺跡で、団長の猪俣さんやグアテマラ、アメリカ、カナダ、スイスの調査員とともに多国籍チームを編成して、学際的な研究を実施している。グアテマラ人調査員がいる時はスペイン語、いない時は英語で会話する国際協力調査チームである。セイバル遺跡は、ゴードン・ウィリー博士が率いるハーバード大学が 1964～1968 年に調査したが、私の恩師サブロフ先生はまだ 20 才代の院生であった。先古典期中期から古典期終末期の約 2000 年にわたる政治経済組織の通時的研究、すなわち、マヤ文明の起源、王権や都市の盛衰、古典期終末期の繁栄と衰退などを研究するのに理想的な遺跡である。

多くの人とのかけがいのない出会い、偶然と幸運が重なり、スペイン語・英語・日本語の数多くの論文を国内外で出版することによって自分の道を切り開き、私はマヤ考古学者になった。学問は情熱であり、歴史教育と研究成果の普及は、研究者としての私の重要な使命である。今後は、日本社会に極めて大きな影響を与える、マヤ文明にかんするテレビ番組や新聞報道などにも機会があれば、より積極的に関与していくつもりである。同時に、2006 年 12 月の古代アメリカ学会の総会において、国立民族学博物館の八杉先生が発言されたように、世界史の教科書におけるコロンブス以前のアメリカ大陸についての質量ともに貧弱な記述をいかに改善していくか、私にできることがあれば最大限の努力をしていきたいと思う。

＜アグアテカ考古学プロジェクトの国際的な調査員（2005 年）、調査団長の猪俣健（中央）と筆者（右端）＞　©青山和夫



＜恩師サブロフ先生と（2006 年、アメリカ考古学協会 SAA 研究大会プエルトリコにて）＞　©青山和夫

（引用文献）

青山和夫

1992　「よみがえれ古代マヤ都市:考古学プロジェクトで」『クロスロード』324:46-50, 協力隊を育てる会.

1997 「国際協力としての古代マヤ文明調査」青山・猪俣『メソアメリカの考古学』pp. 172-176, 同成社.

1998 「訳者あとがき」サブロフ, J.（青山訳）『新しい考古学と古代マヤ文明』pp. 192-205, 新評論.

2004 「日本人とマヤ文字研究」『民博通信』106:24, 国立民族学博物館.

2005『古代マヤ 石器の都市文明』京都大学学術出版会.
Aoyama, Kazuo
2007 Elite Artists and Craft Producers in Classic Maya Society: Lithic Evidence from Aguateca, Guatemala. *Latin American Antiquity* 17(1), in press.

ウルピカンチャ遺跡のパゴ儀礼

徳江佐和子（明治学院大学非常勤講師）

乾期の終わりにあたる８月は、アンデスでは「パゴ（Pago）」と呼ばれる儀礼をおこなう人々がいる。パゴとはスペイン語で「支払い」の意で、大地に対する奉納を意味する。それにより、大地からいろいろな恩恵をあたえてもらうのである。捧げ物の種類、儀礼のやり方、お返しにどのような恩恵を大地から受けるかなどは、その場合によって異なる。例えば、農民や牧畜民は酒や食べ物を大地に捧げ、豊作や家畜の繁殖を願う。またクスコの町中では、家の玄関や店の入り口に丸く小さく切った黄色い紙をまき、1 年の無事を祈る。

考古学の発掘調査の場合は、調査中に事故などおこらず、無事に発掘がおこなわれるように願ってこの儀礼をおこなうことがある。日本の地鎮祭のようなものである。2005 年と 2006 年におこなったウルピカンチャ遺跡（ペルー、クスコ県）の発掘でも、現地考古学者や発掘作業員の勧めにより、この儀礼をおこなうこととなった。知り合いのクスコの考古学者のやり方にならったのだが、発掘調査の際のパゴ儀礼にしては、ひじょうにていねいなものであると感じた。ここではその概要を記そうと思う。

2005 年は、発掘開始の 2 日目である 8 月 10 日にこの儀礼をおこなった。ティポンという町の呪術師にお願いし、彼の指示によって当日までに必要なものをそろえた。「デスパチョ」と呼ばれる奉納品一式の詰め合わせ、コカの葉、チチャ酒、ワイン、牛の胎児、料理、料理を入れる壺、花などである。デスパチョはこの時期になると、市場の中の呪術用品店で売られる。中身や値段も様々あり、今回使ったのは日本円にして 800 円くらいの豪華なものである。アンデス山間部では、儀礼の際にリャマの胎児が使われることが多いが、ここでは牛の胎児を用いた。儀礼に参加したクスコの考古学者によると、「発掘調査は力仕事なので、力がでるように牛を使うのだろう」とのこと。料理というのは、大地に奉納するためでもあり、儀礼の後で参加者たちが会食するためでもある。この準備を発掘作業員たちに頼んだところ、鶏肉とジャガイモの窯焼きにサラダというメニューになった。アンデス山間部では、お祭りや儀礼の時のごちそうとしてクイを食べるが、クイを人数分（15 人）準備すると高額になってしまうためであろう。また、デスパッチョ自体が大地に捧げる食べ物と考えられているため、料理の内容にはあまりこだわらなくて良かったのかもしれない。

＜デスパチョの包み＞　©徳江佐和子

儀礼は昼の 12 時ぴったりにはじめなければならない。呪術師が来る前に奉納品を埋める穴を掘っておく。儀礼と奉納は、囲まれた場所の隅でなければならないため、発掘予定に入っていなかった半円形広場の片方の隅に穴を掘り、もう片方の隅をメサ（奉納品を準備する場所）とした。

12 時ちょうどに呪術師が現れ、儀礼を開始した。民族衣装的なものを身につけているわけではなく、セーターにスラックスという普通の服装であった。地面に置いた布をメサとし、奉納品の準備を始めた。デスパチョの中身は、ミニチュアの十字架、乾燥果物、花や車など様々な形のお菓子、お札の模造品、リャマの脂、トウモロコシ、砂糖、豆、小さく丸く切った黄色い紙などであり、呪術師はそれを紙の上に丁寧に並べていく。その間参加者たちは、折れたり欠けたりしていないきれいなコカの葉を選び、3 枚ずつまとめておく。

デスパチョと牛の胎児をきれいに並べた後、参加者の願い事をコカの葉に託してその上に並べていく。この時点で、儀礼開始から約 1 時間半経過していた。各自願い事を呪術師に告げながら、コカの葉を渡す。コカの葉は 3 枚 1 セットで、3 つ願い事をするため、各自が合計 9 枚コカの葉を

持つことになる。発掘調査のための儀礼なので、まず「調査の無事と成功」を願い、その他は人によって異なるが、「家族の健康」「友人の健康」が主であった。願い事は各自の家の近くにある山に対しておこなわれるらしく、家の近くの山を聞かれた（私はとっさに思いつかず、「富士山」と答えた）。呪術師はコカの葉を口元に持って行き、当人にかわって願い事をケチュア語でつぶやく。これを人数分やるので、かなり時間がかかる。

＜パゴの様子＞　©徳江佐和子

その後、近隣のアプ（聖山）の名を唱えながらそれぞれコカの葉３枚を捧げ、トウモロコシとリャマの脂肪を添えて並べていく。ウルピカンチャ周辺の山々の他、クスコで名が知られた聖山（サルカンタイ、アウサンガテなど）など合計 30 ほどが唱えられた。考古学関係者が名を挙げたため、遺跡のある山にかなり偏っていた。

次にそれらの奉納品をていねいに紙で包み、ひもで結び花を飾る。また、３つの小壺の中にそれぞれ、料理、花、ワインを入れる。それらを持って穴の方へ運ぶ。これが２時 30 分頃であった。すでに火を付けてある穴のまわりに小壺を置き、参加者全員がワインやチチャ酒を穴のまわりにまく。それが終わると呪術師が捧げ物の包みを火に投げ入れる。３つの小壺は脇に別の穴を掘り、そこに埋める。奉納品の包みは完全に燃やさなければいけないため、火は消さずにそのままにし、いったん皆で会食に移り、その後完全に燃えつきたのを確かめて終了となる。終わったのは４時すぎであった。

2006 年は発掘開始が９月２日だったが、パゴは８月中にやらなければならないため、８月 31 日におこなった。今回はルクレという村の呪術師にお願いした。やり方はほとんど同じだったが、細部が異なっていた。たとえば、コカの葉が乾いてしまうといけないと言って、奉納品の準備は室内でおこなった。参加者一人一人の願いごとは言わず、呪術師が各自の名前と家の場所を唱えながら、それぞれの無事と調査の成功をコカの葉に託して祈った。また、奉納品を火にくべる前に、作業員の一人が奉納品を手に持ち、発掘予定地区すべてを歩いた。各自の願い事を言わない分、時間が短縮されるかと思ったのだが、ルクレの呪術師は奉納の品々の並べ方に非常にこだわりがあって時間がかかり、儀礼がすべて終わったのは前回と同じ４時過ぎだった。

もう少し形式的なものを想像していたため、手間と時間がかかるのに驚いたとともに、やや面倒な気も最初はした。しかし、発掘がはじまると作業員たちが何かとパゴのことに言及するのに気づいた。発掘助手であるクスコの考古学者が転んで発掘区の中に落ちてしまった時、「やはり８月の大地は飢えており、食べ物を求めているのだ」「彼女はパゴの時にいなかったから」「しかしパゴをやったから怪我がなくて済んだのだろう」など、皆口々に言うのを聞いて、「やはりちゃんとやっておいて良かった」と思った。発掘調査の際は、現地の文化・習慣を尊重しないといけないことを、改めて感じた出来事であった。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 10 号（2007 年 12 月発行予定）に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後１～２ヵ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

＊投稿に関する連絡先：

佐藤悦夫
〒930-1292　富山市東黒牧 65－1
富山国際大学国際教養学部
Tel：[redacted]、Fax：[redacted]
E-mail：[redacted]

古代アメリカ学会第５期役員会議事録

開催日時：2006 年 12 月 2 日（土）9：05－10：20
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス 34 号館第３会議室
出席者：加藤泰建、大貫良夫、青山和夫、大平秀一、佐藤悦夫、寺崎秀一郎、徳江佐和子、長谷川悦夫、横山玲子、吉田晃章
委任状：佐藤吉文
議長および記録：横山玲子

1. 2005 年度各委員会事業報告

(1)会誌編集：佐藤悦夫委員より、『古代アメリカ』第 9 号を発行した旨報告がなされた。併せて、今号より原稿の募集を随時行なうようにした旨報告がなされた。

(2)会報編集：徳江委員より、2006 年 2 月に会報第 19 号を、同年 7 月に第 20 号を発行した旨報告がなされた。また今年度より、会員の投稿に写真を掲載し、HP には会報を PDF で掲載するようにした旨報告がなされた。

(3)研究大会：寺崎委員より、2005 年 12 月 3 日（土）に第 10 回研究大会を早稲田大学において開催した旨報告がなされた。

(4)広報：大平委員より、今年度の HP は、会報、お知らせ、Web 通信など、8 回更新した旨報告がなされた。

2. 新役員会への引継ぎ事項・申し合わせ事項の確認

(1)事業関係

(1-1)会誌編集：佐藤悦夫委員より以下の点について指摘があり、了承された。

①原稿募集の方法について、テーマを設定するなどの工夫が必要である。

②編集の体制について、委員の増員（現行 2 名を 3、4 名へ）および編集用事務局の設置が必要である。南山大学の渡辺森哉氏に加わってもらいたい。

③版下作成について、予算の問題がなければ外注する方向で検討する必要がある。

④査読については、現在と同じように指導をしながら掲載できるようしていくべきである。

(1-2)会報編集：徳江委員より、すでに文書で事務的な引継ぎを行なっている旨報告があり、了承された。また会報の印刷は、引き続き東海大学で行なうことで合意した。

(1-3)研究大会：寺崎委員より、以下の点について指摘があり、了承された。

①来年度以降の開催場については、早稲田大学以外を検討してもらいたい。

②開催までの事務的仕事に問題はないが、大会当日に人手を動員できる会場を利用することが望ましい。また、会場借料について検討する必要がある。

(1-4)広報：大平委員より、サーバーに HP 管理者変更の連絡をする必要がある以外、特に引き継ぎ事項はない旨報告がなされ、了承された。役員より、カウンターを設けて、どの程度 HP が活用されているのかを把握していくべきだろうという指摘がなされ、合意した。

(1-5)事務局：吉田事務幹事より以下の点について申し出があり、了承された。

①旧事務局から新事務局への引継ぎは、役員会終了後直ちに行ないたい。現在、新事務幹事山本睦氏が渡航中のため、新代表幹事関雄二氏および新役員（会計）荒田恵氏に代理で引継ぎをお願いしたい。

②事務局の移転を、次号会報などで通知する必要がある。

③新役員のメーリングリストを立ち上げる必要がある。

(2)日本学術会議協力学術研究団体への申し込みについて

第 5 期加藤泰建会長より、日本学術会議協力学術研究団体へ申請することが提案され、了承された。この申請については新役員会で行なうことで合意した。

3. 2005 年度決算報告ならびに監査報告

吉田事務幹事より 2005 年度決算報告がなされ、併せて、青山、長谷川会計監査委員より、監査報告がなされた。領収証を見やすく整理して貰いたいという要望が出された。

大貫良夫第 6 期会長より、会費収入が見込みに対して大きく減少している点について質問があり、吉田事務幹事より、滞納者は多くないが、滞納年数が長いため、このような結果がでているという回答がなされた。

4. 2006 年度事業計画案および予算案

吉田事務幹事より、2006 年度予算案が提示され、以下の点について審議した後、原案を修正することで合意した。

①佐藤悦夫編集委員長より、編集委員会の予算から、版下作成費および編集作業アルバイト代を支出して良いかという質問があり、全員一致で了承した。

②『古代アメリカ』第 9 号の印刷費が確定したので、現予算案 300,000 円を 262,500 円に訂正することで合意した。

③会誌発行は大会開催時期に合わせてあり、会計上は、印刷代が引当金として次年度に繰り越されている点について、問題はないということで合意した。

④HP の内容を充実させるためには、アルバイト代なども予算に組み込む必要があり、HP 維持費を 20,000 円から 70,000 円に変更することで合意した。

5. その他

第 6 期役員会の立ち上げに際して、事務局を東海大学から国立民族学博物館へ移転することを確認した。

古代アメリカ学会第５期６期合同役員会議事録

開催日時：2006 年 12 月 2 日（土）10：20－12：00
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス 34 号館第３会議室
出席者：大貫良夫、加藤泰建、青山和夫、荒田恵、伊藤伸幸、大平秀一、佐藤悦夫、関雄二、鶴見英成、寺崎秀一郎、徳江佐和子、長谷川悦夫、横山玲子、吉田晃章
委任状：坂井正人、佐藤吉文、山本睦
議長：関雄二　記録：横山玲子

1. 新役員の紹介

関雄二代表幹事より、新役員の紹介が行なわれた。

2. 引継ぎ・申し合わせ事項

(1)事業関係

横山前代表幹事より、第５期役員会の合意内容に基づき、各委員会活動に関する引継ぎ・申し合わせ事項について報告がなされた。

(2)事務局

吉田前事務幹事より、第５期役員会の合意内容に基づき、事務局引継ぎに関する報告がなされた。また横山前代表幹事より、日本学術会議協力学術研究団体への申請手続きを新役員会で行なって戴きたい旨報告がなされ、了承された。

3. 2006 年度事業計画および予算案の確認

(1)事業計画

(1-1)会誌編集：佐藤悦夫委員より『古代アメリカ』10 号の編集から発行までを行なうことで了承された。

(1-2)会報編集：大平委員より、21 号および 22 号を発行することで了承された。

(1-3)研究大会：寺崎委員より、2006 年 12 月 2 日に第 11 回研究大会を早稲田大学で開催し、また、第 12 回研究大会の準備を行なうことで了承された。

(1-4)事務局：関代表幹事より、名簿の作成・発行は個人情報保護法の問題があり、今後検討していくという提案がなされ合意した。また、日本学術会議協力学術研究団体への申請手続きを速やかに行なうことで合意した。

(2)予算案

第５期役員会で作成した 2006 年度予算案について、審議を行ない、繰越金の内容を一層明確にしていく必要性があることが指摘され、今後の課題とすることで合意した。

4. 会員について

(1)新入会者数、退会者数および総会員数について

吉田前事務幹事より、入会者数（５名）、退会者数（１名）および総会員数（169 名）について報告がなされた。

(2)会費滞納者について

(2-1)吉田前事務幹事より、会費未納者が報告された。

(2-2)現時点で除名に該当する会員について

除名前に、滞納金の支払いを働きかけることで合意した。期限までに滞納金を納めない場合には総会に除名の可否を諮ることとし、退会する場合にも滞納金を納めてもらうことで合意した。また一連の手続きは役員会に一任してもらうよう、総会に諮ることで合意した。

現時点の除名該当者および滞納者については、連絡可能な場合には、役員から直接連絡するが、2002 年度から未払いの除名該当会員については、今総会で諮ることとする。ただし、本人へは説明文を送付し、その後連絡がなければ会長名で除名通知を送ることで合意した。

5. 次期大会開催校について

次年度は、2007 年 12 月 1 日（土）に、大阪の国立民族学博物館で開催することが決定した。2008 年度以降の開催校については、今後検討していくことで合意した。

6. その他

総会議事進行、議長等、および配布資料の内容などについて確認を行なった。

第 11 回総会報告

古代アメリカ研究会第 11 回総会議事録

開催日時：2006 年 12 月 2 日（土）17：10－18：00
開催場所：早稲田大学戸山キャンパス　36 号館 681 教室
議長：大平　秀一（東海大学）
書記：荒田　恵（総合研究大学院大学）

1. 定足数の確認（代表幹事　関雄二）

出席者 42 名、委任状提出者 43 名で合計 85 名となり、会則第 19 条に記された会員数（169 名）の二分の一という条件を満たしているため、総会が成立する。

2. 議長・議事録署名人の選出（代表幹事　関雄二）

立候補がなかったため、役員会が大平会員を推薦し、会員の承認を経て、同氏が議長に選出された。議事録署名人には井口欣也会員（埼玉大学）および土井正樹会員（国立民族学博物館外来研究員）が選出された。

3. 役員選挙報告ならびに承認（選挙管理委員会委員長森下壽典）

2006 年 7 月 1 日に役員選挙が行われ、会長および代表幹事、会計監査人が選出された。投票数 42 票全てが有効投票で、最多票 9 票を獲得した大貫良夫会員（野外民族博物館リトルワールド館長）が会長に当選した。また、投票数 42 票・有効投票数 40 票で、最多票 8 票を獲得した関雄二会員（国立民族学博物館）が代表幹事に当選した。

監査委員 2 名の選出は、投票数 84 票・有効投票数 79 票で、最多票 9 票を獲得した鶴見英成会員（日本学術振興会特別研究員）が当選した。坂井正人会員（山形大学）、杓谷茂樹会員（中部大学）、寺崎秀一郎会員（早稲田大学）が 6 票を獲得したが、選挙管理規約第 7 条 22 項に従い、開票立会人のもと抽選で坂井正人会員が当選した。

4. 新役員の紹介（代表幹事　関雄二）

会長に大貫良夫会員、代表幹事に関雄二会員、監査委員に鶴見英成会員、坂井正人会員が就任したことが紹介された。

運営委員と事務幹事は新会長と新代表幹事によって任命され、会誌編集委員には引き続き佐藤悦夫会員（富山国際大学）、会計委員には荒田恵会員（総合研究大学院大学院生）、広報委員には伊藤伸幸会員（名古屋大学）、研究委員には寺崎秀一郎会員（早稲田大学）、会報委員には大平秀一会員（東海大学）、事務幹事には山本睦会員（総合研究大学院大学）が就任することが報告された。

5. 2005 年度事業報告（前代表幹事　横山玲子）

2005 年度事業として、第 10 回古代アメリカ学会および総会の開催、第 11 回古代アメリカ学会および総会の開催準備、会誌第 9 号、会報 19、20 号および 2005 年度名簿の発行、学会ホームページの更新を 8 回行ったことが、前代表幹事の横山玲子会員（東海大学）より報告された。

6. 会計報告

（1）2005 年度決算報告（前事務幹事　吉田晃章）

「会計報告」に示したとおり、2005 年度（2005 年 10 月～2006 年 9 月）会計の決算報告がなされた。

（2）2005 年度決算監査報告（前監査委員　青山和夫、長谷川悦夫）

前監査委員を代表して青山和夫会員より、前監査委員両人が 2005 年度決算報告を監査したことが報告された。

7. 2006 年度事業計画（代表幹事　関雄二）

会報 21、22 号および会誌 10 号の発行、今回の研究大会および総会の開催、次回大会の準備、ホームページの維持・更新、日本学術会議協力学術研究団体への申請を行うことが報告された。

2006 年度の名簿発行に関して、個人情報保護法の施行もあり、学会としても取り扱いに注意が必要で、今後の役員会で作成の有無を含めて検討することが報告された。

また、次回大会に関して、2007 年 12 月 1 日（土）に国立民族学博物館で開催することが報告された。

日本学術会議協力学術研究団体への申請に関しては、学術会議の改革が一段落し、申請フォームが整えられたので、今後の役員会で手続きを行っていくことが報告された。

この他、八杉佳穂会員（国立民族学博物館）より、世界史の教科書における古代アメリカ史の記述が少ないため、研究成果を教科書に取り込むように働きかけてほしいとの要望が出された。これに対して、代表幹事は今後の役員会の中で議事として検討していくと答えた。

上記の 2006 年度の事業計画案は、承認された。

8. 2006 年度予算案（事務幹事代行　荒田恵）

「会計報告」に示したとおり、2006 年度（2006 年 10 月～2007 年 9 月）予算案が提示され、了承された。

9. 会員状況報告（事務幹事代行　荒田恵）

事務幹事代行によって、昨年度大会以降、新入会者が 5 名、退会者が 1 名で、2006 年 12 月 1 日現在の会員数は 169 名であることが報告された。

10. 次期大会開催校（代表幹事　関雄二）

次期開催校は国立民族学博物館に決定したことが報告された。

11. その他（代表幹事　関雄二）

【除名会員に関して】

会則第 11 条に、2 年間連続して無届で会費を滞納した会員に、会員の多数決をもってこれを除名することが可能であることが記されており、現段階で 3 名の会員が除名対象となっている。この点につき、本日の役員会で審議を行い、一定の条件を付与した上で、除名手続きに入るという案を総会に諮ることが決められ、その旨が報告された。

具体的には、3 名に最終通告として会費督促に関する書面を送り、期限までに会費を納めた場合は除名処分とはしない。その後、本学会にとどまる意思がある場合、引き続き会員の資格を認め、その意思が認められない場合、退会の手続きをとる。こうした手続きに一切応じない場合に限り、除名処分とする、という提案内容である。

この手続きを役員会に一任することを前提に、3 名の暫定的な除名に関する採決を行い、承認が得られた。

12. 閉会の挨拶（会長　大貫良夫）

13. 閉会の辞（議長　大平秀一）

第 11 回研究大会

2006 年 12 月 2 日、早稲田大学で開催された第 11 回研究大会の発表者と発表題目は以下の通りです。

研究発表

(1)「ヘケテペケ川中流域の形成期遺跡群の自然遺物」
鶴見英成（日本学術振興会）

(2)「チャンカイの土器文様」
浅見恵理（総合研究大学院大学）

(3)「ワリ成立前夜：ワルパの土器からみたアヤクーチョと他地域との関係」
土井正樹（国立民族学博物館）

(4)「インカ国家の終焉と崩壊をめぐって」
大平秀一（東海大学）

(5)「テオティワカンにおける長さの単位研究とコスモロジー」
杉山三郎（愛知県立大学）

ポスターセッション

(6)「光記念館所蔵アンデスの布資料の紹介と展示手法について」
吉井隆雄、竹内健二、稲垣幸祐（光記念館）

調査速報

(7)「月のピラミッドの建造年代について：土器分析から」
佐藤悦夫（富山国際大学）

(8)「古典期の「マヤ低地のポンペイ」とセイバル遺跡の研究」
青山和夫（茨城大学）

(9)「チャルチュアパ遺跡タスマル地区 2005－2006 年調査」
伊藤伸幸（名古屋大学）、柴田潮音（エル・サルバドル遺産局考古課）

(10)「ウルピカンチャ遺跡 2006 年度発掘調査報告」
徳江佐和子・熊井茂行（明治学院大学）

(11)「ペルー、カイェホン・デ・ワイラス、ケウシュ遺跡に見る海岸と高地の関係」
松本亮三、横山玲子、吉田晃章、須藤大輝（東海大学）

(12)「チュルパに関する一考察：2006 年パレドネス遺跡の発掘調査より」
渡部森哉（南山大学）

会計報告

（1）2005 年度決算報告（2005 年 10 月 1 日～2006 年 9 月 30 日）

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	
[redacted]		[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]	[redacted]	

[redacted]		[redacted]		

[redacted]	[redacted]		[redacted]
[redacted]	[redacted]		
[redacted]		[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]

（2）2006 年度予算案［2006 年 10 月 1 日－2007 年 9 月 30 日］

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		
[redacted]		[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	

[redacted]

[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]		[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	
[redacted]	[redacted]	[redacted]
[redacted]	[redacted]	

新入会員

2006 年 6 月 20 日から 2006 年 12 月 14 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 172 名となっております。

・[redacted]

・[redacted]

・[redacted]

・[redacted]

事務局からのお知らせ

1. 事務局の移転について

役員選挙の結果に伴い、事務局が国立民族学博物館に移転しました。連絡先は、奥付をご参照ください。なお、メールアドレス（jssaa@sa.rwx.jp）に変更はございません。

2. 会費納入のお願い

2006 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2005 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌の発送を見合わせております。

3. 会報への投稿募集

『会報』に掲載する原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

4. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。ご希望の方は、号数、冊数をお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

5. その他

[redacted]

をご存じの方は、ご一報ください。

次回研究大会の日程変更について

本年度事業計画で提案され、承認を得ました第 12 回研究大会の開催日程（2007 年 12 月 1 日）について、開催予定機関である国立民族学博物館に問い合わせを行ったところ、当日は会場が使用できないことが判明しました。急遽、役員会で検討した結果、2007 年 12 月 8 日（土）に延期することで合意が得られましたので、会員の皆様にご報告申し上げます。なお開催場所の変更はございません。事前に、十分な情報を入手せずに、日程を決め、ご報告した点につきましては、役員会一同、深く反省しております。

（代表幹事：関雄二）

＜編集後記＞

今号より、会報の編集委員を務めさせていただくことになりました。いたらぬ点が多々あるとは存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

今回の会報には、青山和夫さんと徳江佐和子さんにご執筆いただきました。また編集に際し、関先生、山本さん、荒田さんをはじめとする事務局の皆様に、お手数をおかけいたしました。深く御礼申し上げます。

2007 年 2 月　大平秀一

＜表紙写真提供：大平秀一＞

発行　古代アメリカ学会
発行日　2007 年 2 月 1 日
編集　大平秀一
荒田　恵
古代アメリカ学会事務局
〒565－8511 大阪府吹田市千里万博公園 10－1
国立民族学博物館 [redacted]
電話：[redacted]
Fax：[redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/